冨安敬二先生を送る

思い出すこと

藤田昌士
（元学科教員）

冨安さん，親愛の情をこめて，こうお呼びすることをお許しください。

いま私の手許にある文学部教育学科『教育春秋』（2006 年 4 月）によると，冨安さんのご着任は 1990 年 4 月。私の着任は前年の 4 月ですから，私が文学部教育学科に在職した 10 年間のうち 9 年間をご一緒に過ごしたことになります。

あまり思い出したくないことですが，難産の末，お迎えしたのが冨安さんでした。いったん学科で合意したかにみえた人事案が白紙にもどされ，再協議の上，学科の一致した意見であらたにお迎えしたのが冨安さんでした。冨安さんは上記の『教育春秋』にある回想のなかで、就任のお願いをした当時の学科長の説明が、美術教育のための施設・設備等の現状について「非常に慎重に『ぼかしていた』」ようであったと述べておられますが，冨安さんにぜひ就任の内諾をお願いしたいという学科の教員一同の切なる思いが，学科長にそのような説明をさせたのだと思います。

それにしても，心痛むのが（現在は知らず）当時の美術教育をめぐる物的環境の貧しさです。着任された冨安さんも現状の貧しさに愕然とされ，着任早々，当時の総長にも直談判をされた（冨安さんらしい！）ということですが，そういえば私も冨安さんからお叱りを受けたことがあります。当然です。立教着任前の冨安さんは山梨大学教育学部。私は福島大学教育学部。同じ国立大学の教育学部で、キャンパスには美術棟もあれば音楽棟もありました。そのような経験をもつ者として（一学部と一学科との違いはあるにせよ）私自身の鈍感さをあらためて恥じる次第です。

しかし，上記『教育春秋』にあるまことに貴重な年表「教育学科小史」によると，「教育学科音楽会」（1991年1月以降）とともに「教育学科美術展」（1997年1月以降）をみるのはうれしいことです。「冨安敬二　ここにあり」という思いがいたします。

思い出はつきません。冨安さん，今後の生活設計についてはよく存じませんが，今後増えるであろう自由な時間を存分に活用され，ご自身の制作，また美術（造形）と美術（造形）教育論においてますます活躍されるよう、一足先に定年退職を迎えた者として期待しております。

冨安さんご苦労様

松平信久
（元学科教員）

教育学科では長期にわたり，音楽，美術の専任教員の確保が課題であった。学科専任教員6名で発足した学科には芸術関係教員の人事枠がなく，兼任講師による授業担当が，学科創設以来長く続いていたのである。その悲願ともいうべき人事枠がようやく認められて美術専攻の教員を迎えることができたのは1990年度からのことである（音楽の専任枠は数年前から認められていた）。

このような前史を経て美術専任者の第一号としてお迎えしたのが冨安さんである。私は，小学校教育にとって，音楽，美術，演劇などの芸術分野が果たす役割はとりわけ重要だと考えてきたので，その専門家の着任はことのほか嬉しかった。しかし当のご本人にとってはお気の毒なことであったかもしれない。今もって充実しているとはとても言えない芸術教育関係施設であるが，当時は大学自体の施設は皆無で，実技関係の授業は立教小学校の図工室を借用して行われていた。国立大学の教員養成課程から移籍してこられた方にとっては，おそらく想像もできない状況であったことだろう。「とんでもない所にきてしまった」というのが偽らざるお気持ちではなかったかと思う。

したがって新赴任者の奮戦努力は大学内での施設の確保から始まった。大学当局の責任者と直接の折衝を繰り返し，少しずつとはいうものの施設や設備の改善を進めてこられた。そこに注がれたエネルギーとファイトは目を見張らせるものであった。教育内容や方法そのものにも不断の努力が注がれたことは言うまでもない。冨安さんの芸術教育充実への訴えは学科内の条件整備に限らず，大学全体にも及んだから，この領域における立教でのパイオニアの役割を果たされたのである。毎年年度末に行われてきた「教育学科芸術祭」（音楽や美術教育の成果を学科内外に発表する行事）などにも尽力された。作家であり，教師であることを両立させるとの姿勢を終始貫かれたことも冨安さんの歩みを際立たせている。

私は1997年度から，実質的には学科の運営・活動からは離れたので，冨安さんとの具体的な繋がりはおもにそれ以前の7，8年間ということになる。あの頃の学科では教職員がよく飲食を共にした。学科会のあとに馴染み

の店によることは恒例であった。芸術論が戦わせられることもよくあり，そしてそれが深更に及ぶこともままあった。当時かなり遠方から通勤しておられた某氏は終電が出たあとどうやって夜を過ごされたことだろう。

冨安さんはスポーツマンで，その頃もサッカー選手（壮年クラブ？　まさか青年，老年クラブではあるまい）であり，クラシックカーを駆使するカーレーサーでもあった。しかしとくに後者は，私などにはほとんど無縁の冨安ワールドであった。スポーツ関係で僅かに接点があったのは，私が大学を退職する際にご一緒いただいた野沢温泉でのスキーである。颯爽と滑る冨安さんには及びもつかなかったが，同僚としての最後を飾るなつかしい思い出である。

美術室の思い出

田中治彦
（元学科教員・上智大学教育学科教授）

冨安先生とは立教時代に13年間おつきあいをしたが，飲み会で話すことが多かったせいか真面目な話をした記憶がない。教育学科では毎週水曜日の学科会のあとに皆で飲みに行く機会が多かったのだが，そのときに冨安先生と話したことと言えば，ここでは書けないような内容ばかりである。またよく自慢話を聞かされたが，それらはほとんど聞き流していたので覚えていない。

そういう間柄ではあるが，冨安先生を見直す機会があった。立教の最初の卒業生たちの同窓会をすることになったのだが，その内の一人の子どもがまだ1歳で外出が難しいということで，彼女の自宅で同窓会をすることになった。家に行くとその子があるおもちゃで楽しそうに遊んでいた。母親は「このおもちゃは冨安先生のデザインなんですよ。このおもちゃが一番お気に入りみたいで。」と言うではないか。確かにおもちゃが紹介されている雑誌には冨安先生の名前が載っていた。私は初めて冨安先生がほんとうにすばらしい先生であると見直したのである。大人であればお世辞も言うし，相手にも気を使うであろう。しかし1歳の子どもはうそをつかないし，心底正直である。その子どもが支持しているおもちゃというのは本当にすばらしいおもちゃであるに違いない。

私が学科長を務めているときに，美術室の移転の話がもちあがった。立教の初等教育をめぐる施設環境というのは劣悪で，理科室も家庭科室もなく，美術室もプレハブ教室の一角を利用していた。50名もの学生が入ると，実際安全上も大いに問題であった。耐震構造からいってもいよいよ限界である，ということで美術室の移転の問題がもち上がった。教育学科としてはこれを機会に，美術室のみならず音楽室や理科室も含めて初等教育全体の施設の改善の要求を総長室に出すことになった。

それからの1年は言葉にできないほど大変な日々であった。一時期はほぼ毎週のよう

に総長室を訪れて交渉した。教育学科の教員全員で手分けして，すべての学部長を訪問して学科の要望を理解してもらうように働きかけたこともある。この間冨安先生は粘り強く，ときには強引に交渉をしていた。その交渉術には私も学ぶところが多かった。ともかくもそのおかげで現在の４号館の美術室が誕生した。教育環境が改善されたのは冨安先生にとっても学生たちにとっても幸いなことであった。

冨安先生にはこれからもそのユニークなパーソナリティを生かして，末永くご活躍されることを期待します。

忘れがたい言葉

坂倉裕治
（元学科教員・早稲田大学教育総合科学学術院教授）

人生には，忘れがたい言葉がある。「あなたに期待することは，半分はご自分の専門の研究。半分は学生の指導と大学の運営です。」着任したばかりの私にこのように訓示されたのが，当時学科長の任にあった冨安教授だった。はじめての常勤ポストを得たばかりの私にとって，この言葉にこめられた深い意味を理解することなど，とうていできはしなかった。やがて，冨安教授とは上司と部下の関係ではなく，同僚となり，戦友となった。そして，この言葉には，未熟な若手教員を暖かく見守る深い愛情と，大学教員としての広い見識がこめられていたことを確信した。自分に与えられた力と時間の半分を，専門性を磨くことに捧げ，もう半分を教育と大学運営に捧げること。それを貫こうとすれば，厳しい戦いに挑まないではすまされないことを，あとになって，身をもって学ぶことになったのだった。

地位や名声を獲得するために学問文化を利用するのではなく，学問文化に身を捧げて奉仕しようとする研究者が教壇に立つのは，自ら選んだ専門をきわめたからでは断じてない。決してきわめることなどできないから，次の世代に希望を託すために教壇に立つのだ。

在職中，冨安教授は，専門を異にする私の話もよくきいてくださった。必ずしも理解していただけたわけではない。ときに意見や立場の違いから激しく対立することもあった。それにもかかわらず，いや，それだからこそなのだろう。私たちのあいだには，理解できないままに互いを尊重しあう信頼関係が築かれたのだった。それはなによりも，冨安教授ご自身が，自らの専門性を守るために，未来に希望を託すために，孤独のうちに，厳しい戦いに挑んでおられたからにちがいない。立教に共にあった最後の数年間を通じて，私たちは紛れもなく戦友だったのである。

冨安先生の信念

前田一男
（現学科教員）

センターサークルに，パープル色のユニフォームに背番号９をつけた，自称“八王子のラモス”が颯爽と立っていた。1995年１月15日，冨安ゼミ対前田ゼミのサッカー対抗戦の時のことである。今はもうない新学院の土のグランド，結果は４対３で冨安ゼミに軍配が上がった。その１点はストライカーとしての冨安先生がゲットされたのではなかっただろうか。現在の大学教員の多忙さから考えれば，また体をまだ動かすことができた若さを考えれば，夢のような懐かしい時代の一コマだった。冨安先生は，サッカーに限らずスキーもお上手で，またＡ級ライセンスを取得しクラッシックカーレースにも挑戦される，こだわりの趣味人だった。

もうひとつ鮮烈な記憶があるのは，ご尊父，冨安昌也氏の作品である。たしか目黒の美術館に作品が展示されているとのご案内を先生からいただき，観に行かせてもらった。正確なタイトルは忘れたが，ご家族の肖像画だった。家族一人ひとりの表情が，写真よりも写実的に迫ってきて，キャンバスいっぱいに家族の等身大が見事に描かれていた。その後列右に敬二先生がいらっしゃった。透き通った眼ざしから描かれる優しさと厳しさとを併せもったその作品は，出会ったその時のインパクトとともに，忘れることができない。昌也氏が，水彩画の世界で日本でも有数の画家であり，地元の愛知県豊橋にも多大な貢献をされた方だとはあとから知ることになった。

そのようなDNAを継承される冨安先生の美術教育に対する姿勢は，厳しかった。それは，先生の確固たる信念に貫かれていた。造形表現を指導できるスキルはしっかりと訓練して獲得しなければならない，その技術があるからこそ子どもの創造的な表現活動を指導し支援できるのだ，図工の時間を「癒し」の機会にしたり，いわんや「息抜き」の教科にしたりしてはならない，という信念である。文学部で当時の８学科を横断する新しい試みとして1996年から設けられた比較文芸・思想コース（現在は文学科文芸・思想専修と現代心理学部映像身体学科に発展的に解消）でも，冨安先生はデザインや漫画，表象文化を研究したいとする多くの学生のチューターとして活躍された。このコースの学生とて，学科の学生と同様，必ずしも芸術的センスが横溢する学生たちばかりとはいえず，そのような条件の中で，期待するからこその教育には，遅刻欠席などの躾の側面も含めて，厳しく対応された。その教育方針には，確かに信念があった。

10年ほど前から，腰痛と狭心症を治療されている。周囲が心配する中でも，学外にあっては作家活動のほか，美術教育関係学会の要職や多くのコンクールの審査員を務められ，また学内にあっては年報や学会誌の表紙デザインの制作，学科待望の図工室の設計と新設，ロイドホール施工への助言，近年では歴史的な評価を待たなければならないだろう「教育系教育組織の改革」の委員会でも尽力された。さまざまなお仕事に感謝するとともに，ご退職後は，なによりも健康に留意され，哲学や幾何学を潜ませたユニークな作品の創作に取り組まれんことを心から期待したい。

冨安敬二先生の御退職を祝って

石黒広昭
（現学科教員）

2014年度をもって我々の同僚である冨安敬二先生がご退職されます。これまで学科に関わることはもちろんのこと，学部や大学にとっても重要なお仕事をされてきたことに大変感謝しています。とくに印象に残っているのは大学院主任としての仕事ぶりです。大学院入試は入試としての正確さが求められますが，学部入試と違い，教員が手作業で行う部分が多くあり，神経を使う仕事です。冨安先生はミスが起こらないように何度も内容を確認されながら，丁寧な作業をされていたと記憶しています。また，教育学科には初等教育課程がありますが，その施設は貧弱で，冨安先生も長年美術教育の場として古い施設を使っていましたが，根気強い交渉の末に新たに造形教育等に使える部屋を確保することができました。まだ十分な教授環境ではありませんが，それでも以前に比べればだいぶましになったようです。学部では現在文学部が入っているロイドホールの設計過程において業者と大学当局の橋渡しもされていたと聞いています。このように冨安先生は学科や学部を下支えする役割を果たしてきました。

冨安先生は造形活動をご専門とし，造形教育環境の研究をされるだけでなく，実際にデザイナーとしてもお仕事をされてきたと聞いています。学科では２年生の秋にゼミ選択ガイダンスを行い，それに基づいて３年次のゼミが決まるのですが，冨安先生はご自身がデザイナーとして関わった作品を示しながらよく自己紹介されていました。冗談を交えたその話芸（？）に惹かれた学生も多く，毎年多くの学生が冨安ゼミに参加していたのではないでしょうか。おそらく退職記念パーティーには多くのゼミ生が集まり，思い出話に花を咲かせることでしょう。

以上のように大学の管理運営，教育，研究と大学にとってとても大きな貢献をされてきた冨安先生が本学を去ることは誠に残念でなりません。しかし，デザイナーとしてのお仕事はそれとは関わりなく続けられることでしょう。在職中，時間をみては気に入った大学の風景をスケッチされ，絵葉書を作成していたことはよく知られています。おそらくまだ描かれていない場所もあるのではないでしょうか。ご退職後も学内でスケッチをされる姿を拝見することはできるのでしょうか。冨安先生にはご退職後も引き続き教育学科はもちろん，文学部，さらには立教大学のご意見番として私たちの今後を見守っていただければ幸いです。これからも健康には留意され，お元気で益々ご活躍されることをお祈りいたしております。

冨安敬二先生に感謝を込めて

河野哲也
（現学科教員）

今年度，私は在外研究の機会をいただき，前半はフランスのパリ第七大学の東アジア言語・文明学部に，後半はアメリカ合衆国，テキサス州のノース・テキサス大学環境哲学研究所にて自由に研究させていただいています。この原稿も，環境哲学研究所の研究室で書いております。

サバティカルをはじめていただいたということは，私が本学に勤めて７年目に当たるのですが，冨安先生にもその間，お世話になったことになります。この７年間，ずいぶんといろいろな出来事がありました。大学や学部の方針からさまざまな要請や要求が学科に降りかかり，文科省や東京都による教育政策変更への対応，文学部のロイドホール新研究室への移動，そして何名かの学科教員の退職と新規教員の採用と，忙しすぎる時期であったように思います。そのなかで冨安先生は，前総長や前部長会との交渉，新研究室の設計と配置，大学院教育の指導，新教員採用など，お体の調子が万全でない中，学科の発展と学生教育の責任感から，あまりに多くのお仕事を，文字どおりに身を粉にしてお引き受けくださいました。さまざまな，しかし必ずしも愉快ではない業務を担当され，さぞご負担をおかけしたと思います。私を含め，在任年数の少ない教員に研究と教育のための時間の余裕を与えてくださったことに心から感謝いたします。

また冨安先生の学生指導も印象に強く残っております。不器用であってもまじめに学問に取り組む学生への暖かいまなざしと支援，子どもの教育というこの上もなく責任の重いはずの事業に対して自覚を欠いた学生への厳しい指導は，先生の価値観を示しておりました。人間性と他者への敬意をなによりも重んじた学生指導をされていたと感じております。

ご専門の美術は，教育にとって最も重視すべきものです。いまだに教育をどこかで過去の知識の「伝達」と考えることの多い日本の教育に欠けているのは（必要なのは，「伝達」ではなく「提供」です。その違いに気づいていない教員が多いことが問題ですが），物や人間や生き物や事象に直接に接して，そこから自分独自の感覚を少しずつ養い，それを鋭敏にして，新しいものを作りだしていく創造性の教育です。それは，眼の前にある物や生き物や人間に対する愛情から育ちます。それは，何であれ，丁寧に，敬意をもって扱う芸術的感性にこそ宿ります。美術とはそうした創造性を孕んだ感性を育てることであり，教育の本質そのものだと理解しております。美術の側面は，あらゆる教科において導入され，あらゆる教育で尊重されなければならないものです。未熟の身ながら，冨安先生が身をもって示されたこの教えを受け継いでいくように努力していく所存です。

ご退職，おめでとうございます。ご指導，ありがとうございます。

教室は学びの重要な空間
――その主である冨安先生に感謝して

増茂智子
（兼任講師）

冨安敬二先生がご退職と聞き残念な気持ちでいっぱいです。しかし立教大学でのお仕事を全うされ，晴れて責務からのご卒業と考え祝福させていただきます。またこのたびは，兼任講師の私にも記念号の「冨安先生に贈る言葉」の投稿機会をいただき感謝申し上げます。

私は先生が主である教室の間借り人です。大切な空間を使わせていただいた者として，先生に深謝申し上げます。私と立教大学とのご縁は1999年度からです。当初は一般教室のみの授業でした。2004年度から小学校家庭科の指導に必要な技能面の習得ができるようにと，被服実習や調理実習が可能な教室を希望したことがきっかけで，冨安先生の教室と出合いました。初めは15号館で，当時その教室は7号館奥の教材印刷室の2階にあり，外階段を上がって入室すると図画工作(造形)等の学びに満ちた空間がありました。所狭しとさまざまな作品や教材が置かれ，テーブル型ミシンも作品等の置き場になっていました。冨安先生が苦労されて大学内にこのような教室を整備されたのだとわかりました。その後4号館別棟3階の現在の教室に移転する際には，さらなるご苦労があったと思います。エレベーターの無い4号館別棟3階は，建物の状況からも第1希望の教室ではなかったと思います。しかし一般教室と異なり，教室設備で水回りや電源も多く必要で，重量のある機材や教材，大机等を設置する関係から，先生は何度も設計図（図面）を練り直し，大学当局にも掛け合い交渉し，漸く決着したところが現在の教室でした。私が担当する「家庭科」にも多大な配慮をしてくださり，体験学習ができる空間を確保してくださいました。

この教室には冨安先生のセンスが散りばめられています。たとえば床や壁面等の色です。以前先生からクレヨンの「はだいろ」は一色ではなく，それをメーカーにも訴えたことを聞きました。世界にはさまざまな肌の色の人びとが存在しすべてが大切にされるべきです。それは教育にも繋がることを学びました。木製の机や椅子にも温かみを感じます。都心にある文学部の一学科で，このような教室の確保は並大抵ではなかったと思います。冨安先生の熱意が今日の学習環境の整備と教育現場への教員輩出においても功績を上げたと思います。今後はご健康に十分留意され芸術家としてのお時間を大切になさってください。これまでのご尽力に感謝申し上げます。

冨安さんの眼に世界はどう見えているか？

栗田和明
（史学科教員）

冨安さんのお仕事は，ロゴのデザインやポスターなど平面化した表現の分野しか知りませんでした。ところが最近になって，立体物を写実的に表現した画も拝見し，その訓練された技量に印象づけられました。対象をよく見る力と，それを一般的な形式で表現する技量と，さらに解釈を加えてあらたな視点を示す力は，連動しているように思います。

複数の方向から人間の頭をみて，それを一度に平面に投影したようなピカソの表現はとても印象的であたらしい見方を提示しています。同じピカソが，一定の視点から遠近法に忠実に，いわば常識的な視点でデッサンして，破綻がない完璧な図を示している作品も残しています。

最初に対象を見るときに，訓練された技量をもっているために，それがかえって見方を拘束することも，自由にしたりすることもあるでしょう。美術畑で訓練を受け，その能力を発揮している人には周囲の様子はどのように見えているのか，とても気になります。

モールス信号に習熟している人が町で救急車に遭遇したとします。この人にはサイレンのピーポーピーポーが，CQ CQ（－・－・がC，－－・－がQ）と聞こえるようです。CQ CQは無線で交信を呼びかけるときの符号で非常に頻繁に使用します。ピーポーピーポーはCと聞こえて，Cを聞くとQがつづいて出てきてしまうのかもしれません。モールス信号には和文もあり，これに習熟している人もいます。こうした人にとっては，日常の種々の音が，なんらかの呼びかけに聞こえているのではないかと想像します。鳥のさえずりを意味がある文章に聞き慣わすのも同じようなことでしょう。

さて，文学部教員が棲み着いているロイドホールですが，冨安さんは建物のプランや設備だけでなく，壁紙の選択にまで目を配ってすてきな空間をアレンジしてくれました。おかげで我々は快適に過ごしています。ただ，私が気になるのは，男子トイレで小用にたずさわっているとき見つめる前面の壁紙にどうも焦点が合わないことです。あたかも3D絵本から立体像を取り出そうとしてうまくいかないときのようです。これは，冨安さんがこうした壁紙をあえて選択し，利用者の焦点が合わないように仕掛けているのではないか，といつも想像しています。

集中しないでぼーっとすることを冨安さんは説いているのか，我々に混乱を楽しませているのか，もっと全体を眺めることを励ましているのか，いつも想像して楽しんでいます。冨安さんと私は教授会では，ほとんどいつも部屋の反対側に座っています。「あそこに座っている冨安さんからはこの教授会の風景はどう見えているだろうか」と気になることもありました。教授会に限らず，冨安さんには周囲の様相がどう見えているかと想像していました。

私には訓練と素養が足りないので，冨安さんと同じように世界を見ることはできないのですが，それでも芸術家に周囲がどう見えるかに思いめぐらすきっかけをもらっています。ありがとうございました。

万能の芸術家，冨安敬二先生へ

加藤磨珠枝
（キリスト教学科教員）

冨安敬二先生と立教大学でご一緒させていただいたのは，私が着任してから先生がご退任なさるまでの５年間でしたが，先生の優しいお人柄と東京藝術大学でともに美術を学んだ先輩・後輩ということもあり，学科は異なるもののお慕いして，本学についての多くを学ばせていただきました。とりわけ，冨安先生が文学部の企画広報委員長をお務めになられた３年間を，一委員としてご一緒し，文学部案内パンフレットやホームページのイメージ戦略についてお話しをうかがえたことは，今でも良き思い出です。

冨安先生にまつわるエピソードは数々ございますが，キリスト教学科の全教員が今でも感謝しておりますのは，2012 年９月に竣工したロイドホールへの文学部移転事業をめぐる或る出来事です。冨安先生はご専門である空間デザインの見識を生かして，新館の建築プランにおける各研究室の床面積，窓の配置，人の動線などについて細やかなアドバイスを与え，文学部教員の研究環境，学部事務一課の職場環境を整えてくださいました。その際，大学側から提示されたキリスト教学研究科の院生室数（３部屋）についても，在籍学生数に基づく複雑な割当計算式の誤りを指摘し，大学側と交渉の末，結果的に４部屋の院生室を確保してくださいました。私を含めた当該教員たちが誰も気づかなかった計算ミスを見抜かれた，先生の数学的・空間的緻密さに，私はルネサンス期の幾何学的遠近法に精通した芸術家を見た思いでした。先生のおかげで，わが院生たちは今も快適な空間で研究生活を送っております。

そのほかにも，授業期間の合間をぬって制作なされた「立教大学水彩画シリーズ」は，先生の芸術家としての感性にふれる印象的な機会でした。本学は英国聖公会の伝統に属しておりますが，その英国を本場とする水彩画技法を用いて，先生がお描きになった池袋キャンパスの四季折々の美しさは，本学への深い愛情に溢れています。このシリーズは絵葉書として商品化され，セント・ポールズ・プラザのお土産としてコアなファンを集めているようです。また，学外においても「世界こども図画コンテスト」など数々の絵画展審査員をこなしつつ，スポーツカーを粋に楽しむお姿は，傍らで拝見して実に爽快でした。

最後にもう一つ，忘れ難いのは，冨安先生の奥様に対する深い慈しみです。ご自身の健康に不安を抱えながらも，療養中の奥様に寄り添い励まし続けたこの１年は，近くにいる私どもの内に，かけがえのない宝物を示してくださいました。これまでのことをあらためて想い起しつつ，場所は離れても，狭い日本の美術界で先生と協働できますことを歓びに，今後も努めてまいりますので，どうぞこれまで同様，ご指導ください。

いつの日か，スポーツ・カーをかっ飛ばす，冨安先生と会う日を楽しみに

下山寿子
（元助手・高崎商科大学教授）

冨安先生が着任された頃，私は学部学生であった。細やかなデッサンと色彩に彩られ，繊細で優しいお人柄が伝わってくるような作品をお描きになる先生であることは承知していたが，私は教育心理学を専攻していたので，直接先生からご薫陶を賜ることはなかった。

先生と親しくお話をさせて頂くようになるのは，助手になってからのこと。3年間という短い期間ではあったが，助手という立場で先生にご指導を頂いた。

当時は，室俊司先生，松平信久先生，藤田昌士先生，武藤文夫先生，前田一男先生，佐々木一也先生，北澤毅先生，小山真紀先生たちがスタッフでおられた。職員の桑山直子さんとともに私は，未熟ながら助手の仕事をさせて頂いた。

ところで，学部学生の時代に抱いていた冨安先生の芸術家としてのイメージは，助手になって一変した。

ここに当時の大学院の学生たちが編んだ『立教大学大学院　教育学専攻院生自己紹介(1998)』というガイドブックがある。冨安先生はご自身について，「趣味はサッカー（クラブチーム代表FW），テニス，スキーなどのスポーツ，最近車道楽もひどくスーパーセブンなる車を手に入れサーキット走行にて開眼（アブナイ！！）」としたためておられる。先生は，芸術だけでなく，スポーツを，そしてまた「車」をこよなく愛しておられた。スポーツといえば，やはりサッカー。当時プレイヤーとして活躍中のラモス瑠偉とご自身を重ねながら，サッカー談義に熱弁を振るわれておられた。また「愛車」といえば，学科の先生方との旅行先でのこと。山間の田舎道を走行中，通りすがりの女性に道を尋ねようとしたら，そそくさと逃げられたと嘆いておられたお姿を思い出す。田舎道にはそぐわない，かっこよさで走行されていたのだろう。

長らく先生とは親しくお話ししていないのだが，多才な先生のことである，ご退職後は，ご研究に，スポーツに，そしてなにより作品を制作するための豊かな時間を心待ちにしておられるのではないかと拝察する。

またいつの日か，どこかで先生がスポーツ・カーをかっこよく，かっ飛ばしているお姿に出くわすことができるのではないかと楽しみである。

永年にわたり，立教大学の初等教員養成にご尽力を賜ったことを卒業生として，助手経験者として，謝意を述べたい。本当にありがとうございました。

冨安敬二というアーティストとの出会い

山嵜雅子
（元助手・学校･社会教育講座特任准教授）

冨安敬二先生と初めてお目にかかったのは，私の大学院入試の面接のときであった。緊張していたのだろうか，教育学科のすべての先生とお会いしたはずなのに，そのときお顔を拝見したと覚えているのは，室俊司先生と前田一男先生，そして冨安先生だけである。室先生は大学院主任として私に質問をなさったからであり，前田先生は私の発言にコメントされたから記憶しているとして，冨安先生については，質問を受けたわけでも，言葉を交わしたわけでもない。それでも記憶に残ったのは，おひげをたくわえたダンディな風貌が目立ったことに加えて，教育学科の他の先生たちとは少し異質な雰囲気が注意をひいたからだと思う。その「異質な雰囲気」が，先生のアーティスト気質によるものだと知るのは，私が教育学科の助手になり，学科長であった先生といろいろお話するようになってからである。

先生がアーティストであることは紛れもない事実だが，先生との接点が増えるにつれ，先生の趣味や関心や嗜好，ライフスタイルや美意識や世界観まで，どれをとっても芸術家のにおいがついてくることを実感した。センスがよく，何をやっても上手だしカッコいい。思い入れやこだわりが強い反面，自由で，柔軟で，独自である。表現方法に乏しい私には，そのアーティスト性を十分に説明しきれないが，ともかくも，「美や価値を創造する人は，私のような朴念仁とは同じ次元にはいないのだ」とよく思ったものである。

一方で先生は，芸術家には珍しく（？），実務能力にも長けておられた。ちょうど文学部の再編が叫ばれ，問題が噴出していた時期に学科長を務められたわけだが，丁寧に職務を遂行され，読書室の私たちにもいろいろ配慮してくださった。また美術教育関係の設備がきわめて不備ななかで，先生は乏しい器材と施設を工夫して利用し，大学側へ改善と充実を粘り強く交渉しておられた。

しかしそうした現実的な仕事が，アーティストとしての活動に負担とならないはずはない。いつであったか先生が，「大学の用事に追われ，創作活動になかなか時間がとれない」とおっしゃっていたことを思い出す。今私は非常勤講師として美大に出講しているが，そこで目にする風景と比較すれば，先生が居られた場所は創造的な仕事に有利とはいえなかったと思う。先生が「異質」と映る空間は，アーティストの先生にとっても「異質」でご苦労がともなう場であったのではないだろうか。

私は，この立教大学で冨安敬二というアーティストと出会い，その世界を垣間見る幸運を得たことに，とても感謝している。そして先生には，これから実務から解放された時間を思い切りご自分のために費やして，すばらしい作品を生み出していただきたいと願うばかりである。ご健康に留意され，ますますご活躍くださることを祈っている。

冨安先生との思い出

高橋靖幸
（元助手・立正大学社会福祉学部子ども教育福祉学科）

私は，冨安先生から学部生時代の４年間，大学院生時代の８年間，そして助手時代の３年間と長きにわたって，学業の面や仕事の面でいろいろとご指導をいただく機会に恵まれました。

冨安先生との思い出でとくに忘れられないのは，学部生時代，初等教育課程の必修科目として履修した先生の美術教育の時間です。思い返してみますと，美術教育の授業は３年次の必修科目なので，たった１年間の履修であったはずなのですが，私はそれ以上の時間この授業に参加していたような不思議な感覚をもっています。これは当時，授業以外の時間にも，美術室で作品の制作に没頭し，また友人らとも談笑しながら（ときには夕方の日が暮れる時間になるまで）楽しい時間を過ごしたことが大学生活の充実した思い出となって，いまの私のなかに刻まれているからなのかもしれません。

美術教育の授業については，先生との思い出のエピソードがあります。それは校内写生でキャンパス内の風景をスケッチする時間でのことです。私は授業の中で本館の建物を描いていたのですが，その出来は（きれいな表現でいえば）中世西欧絵画のような，（もっと現実に即していえば）遠近法を無視した平面的な見栄えの悪いキャンパスの風景画でした。そのような私のスケッチに，冨安先生はニコニコとされながら（あのいつもの笑顔で！）ほんの少しだけ手を加えてくださり，写実的に描くコツのようなものを説明してくださいました。すると私の絵は見違えるほど良いものとなったのです。私はこのときたいへん驚いたことを覚えています。遠近法という言葉は知っていましたが，それが自分が描く絵の中で具体的なかたちとなって表れてくるとき，興奮に近い驚きが私の中に生まれたのです。こうした驚きの体験は，彫塑の時間に動物の骨格や筋肉を想像しながら対象と向き合うことの大切さを，実際に粘土に触れながら考える経験や，その他の授業内の多くの活動を通じて得ることができました。美術教育の面白さと重要さを先生から学んだ私は，その後大学院生時代に，先生の美術教育のTAを２年間行わせていただいた中で，いかに私の経験を後輩たちへ伝えられるかを自分の課題としていたのを覚えています。

研究資料準備室で助手を勤めさせていただいた時期にも，冨安先生はいつも私の仕事を気にかけてくださっていました。先生からは機会ある度に助手の仕事の忙しさを心配いただくお声かけをいただき，私はその言葉にいつも恐縮しつつ，とても励まされていました。助手の仕事を辞める際には，先生からメールと電話で暖かい送別の言葉をいただきまして，それはいまでも私の中で大切な思い出となっています。先生から教えていただきましたそうした仕事の上での心配りと気遣いの大切さを，私はこれからも忘れずにいたいと思っています。

冨安先生，ご退職おめでとうございます。

冨安先生お疲れ様でした

桑山直子
（元職員）

冨安先生

定年ご退職おめでとうございます。そして本当にお疲れ様でした。

私は，1994年4月からの7年半を，文学部教育学科読書室で勤務させていただきました。教育学科は，美術展や音楽会など行事も多くて，楽しく過ごさせていただき，その間冨安先生とはずっとご一緒で，大変お世話になりました。

教育学科の先生方は，演習や卒業論文指導やご担当科目のほかに，「初等教育実習」にかかわるお仕事があって，生活指導的なことも含めてご負担が大きく，皆様お忙しいわけです。冨安先生も，同様にとてもお忙しくされていたと思います。また実技指導のある先生方は，教材の用意など授業準備等へのご負担もあるわけです。冨安先生は美術のご担当で，初等教育専攻の学生に「図画工作教材研究」で小学校の教員に必要な美術教育の指導をされていました。しかし，その授業に必要な施設や設備は不完全だったため，ご苦労されていらしたと思います。私が参りました頃は，美術教育の教室は，大学キャンパスの隅にある小さな2階建ての建物の2階にありました。以前は，大学の弓道場だったところを改修した教室で，粗末というか簡単な戸棚やキャビネットしかありませんでした。管理や収納には大変ご苦労されて，工夫をされながら運営されていたと思います。またパレットなどの洗浄用のシンクがありましたが，その清掃まで，先生がされていらっしゃることも多かったと伺っているので，お忙しさはとんでもなかったのではないでしょうか。そんな多くのご担当科目や，演習，卒業論文指導，そして教育実習のための出張などを，速足で移動しながら，いつも誠実に，全力で努めていらっしゃったお姿が印象的でした。

そんな，大学でのご多忙な生活の中でも，芸術家としての「制作」への意欲もずっとおもちになっていらして，そんなご様子も伺っていました。制作にあたっては，とくに「色」に対するこだわりを強くもっていらしたように感じました。あくまでも良いもの，思うようなものを創りたいと，追求する姿勢を強くおもちでいらしたと思います。ある年の展覧会で，出品された作品を見せていただきましたが，まるで工芸品のように緻密な，美しい色のグラデーションに，感動させられました。

ご退職されたのちには，ゆっくりと思うままに，制作される時間もおもちになれるのではないでしょうか。今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

こだわりの開拓者

渕 博子
（元教育学科読書室職員）

立教大学の教育学科は，ほんとうに素晴らしい初等教育の人材を輩出しています。どの世界でもそうだと思いますが，その草創期には人の力だけで困難を乗り越え，その力が徐々に大きくなり，人の力だけではなく，道具やその他のものが力を発揮して，さらに強力な力となっていくのでしょう。教育学科の初等教育課程は，まさにそのようにして力をつけてきたと思います。

冨安先生は，初等教育課程の設置の要件が厳しくなったために専任の美術の教員が求められ，着任されました。それなりに評価の高い教員養成の大学と思われて着任されたと思いますが，おそらく，その施設の貧弱さには愕然とされたことでしょう。実技系教科では依然として人の力だけで行う教育に近い状況にあり，もはや限界に近い状態だったのではないでしょうか。

そのような驚愕すべき環境のなか，先生は敢然と立ち上がられました。振り返りますに，先生は開拓者なのではないかと思います。先生の学生時代は存じませんが，きっと新しいものに挑戦し続ける姿勢をおもちだったのではないでしょうか。学科で事務をしていたわたくしは，焼き物をつくる窯を買う，とおっしゃった先生に，ほんとうはびっくりさせられました。それまでの「図画・工作教材研究」や「美術」は，あるもので授業をすすめ，おそらく彫刻や焼き物などはしたことがなかったのではないでしょうか。先生は妥協せずさまざまな美術の分野の実技を学生にさせてくださいました。学生はさぞ楽しかったことでしょう。新設された文学部の比較文芸・思想コースでも，先生はその本領を発揮されました。芸術系の多様な学生の興味にそった卒業制作を，目を細めて楽しそうに指導していらしたのを懐かしく思い出します。

そのような先生のこだわりの開拓者精神は，文学部の研究室が，新しくできた図書館と同じ建物に入ることになり，その構想段階で再び遺憾なく発揮されました。図面まで描いて，ねばり強く交渉を重ねるという情熱を傾けられ，ほんとうに頭が下がる，と多くの先生方，職員の方をして言わしめた結果，実に見事な研究棟の完成となりました。

これまでの先生は，このこだわりをもって切り拓く精神で過激にこられたことと思います。これからは，数年前から始められた，大学構内を水彩画で描かれているお仕事にみられるような，おだやかな調和の目も加わった，さらなるご活躍を楽しみにしています。

バブル経済末期の出会い

岩渕隆文
（1991年度卒）

ニューヨークの象徴でもあるロックフェラーセンターを日本の不動産会社が購入した。株価は38,000円を越え，東京の深夜の歓楽街ではお札を振りながらタクシーを止めようとするサラリーマンが溢れかえる。立教大学のキャンパスでもフレッドペリーの白いポロシャツの襟を立ててセカンドバッグを持つ男子や，太い眉毛に真紅のルージュ，ワンレングスにボディコンシャスをまとい，ルイビィトンのボストンバッグを持つ女子が闊歩していたバブル経済末期。

冨安先生が立教に着任されたのはそんな年代でした。某県の国立大学から東京のミッション系私立大学への赴任は，さぞかし隔世の感があったのではないでしょうか。「YMOの高橋幸宏」。最初に冨安先生を拝見し，芸術系の先生とお聞きした際の素直な第一印象でした。

実は，先生が立教に赴任された90年度は，本来の四年生であった私自身は米国遊学のために休学していたので，お世話になったのは復学してからの91年度の一年間で，卒業論文をサポートしていただきました。

当時は，自分が米国に居る最中に湾岸戦争が開戦，帰国した途端それまで飛ぶ鳥落とす勢いだった日本経済のバブル崩壊という歴史の節目に直面して，自身をとりまく環境においてさまざまなカオスが生じていました。そこに，根拠のない自信をもっていた「自我」が重なり，さまざまな状況下で「アイデンティティ」を模索している自分が居て，結果的に選んだ卒業論文のテーマが「頽廃と快楽の中に介在する人間」という荒唐無稽なものでした。本来であれば，論文には相応しくない，論文とは呼べない，却下されるような内容，文体であったのですが，そのような背景と混乱しきった個性を何とか集約して，テーマを変更することもなく論文化できるようにサポートしていただきました。

その後，私は一般企業へ就職して教育界とは離れて，仕事と人生の慌ただしさにかまけてしまい，先生と接触を計ることもせず，教育学科50周年記念行事に参加した際での再会となってしまいました。不逞な輩だったがゆえに覚えていただいたようで，その際，2014年度で退職である旨を伺った次第です。大学でお世話になった先生の退職記念行事に立ち会うのはこれが初めてで，自分の年齢が，出会った当時の冨安先生の年齢とほぼ同じというのも何かのご縁と感慨深いものがあります。

出会った当時とは異なり，今はインターネットでのデジタルな空間で関係を持続させることが可能にもなり，先生にはFaceBookで「友達」になっていただきました。リアルな世界においても，デジタルな世界においても，今後ともご指導，ご鞭撻いただきたいと思います。

冨安先生との思い出

金丸由和
（1994年度卒）

私は昔から美術の先生が好きだった。それは，多くの先生がネガティブチェックばかりしてくる中で，美術の先生はその人間の「長所」を見つけて，褒めて，そこを伸ばそうとしてくれる人が多いと感じてきたからだ。

そういう意味で冨安先生は，ある程度「短所」に目を瞑ってでも，私のような人間の数少ない良いところに目を向けてくれていた先生で，私にとって忘れることができない先生であった。

私が思い出す冨安ゼミでのエピソード。夏休みの合宿での宴会。夜中まで大騒ぎして，延々と終わらない宴。冨安先生は，笑って明け方まで我々に付き合ってくれた。翌日のディベートでは，大半の生徒が戦意喪失していた。（先生も相当辛かったと思う）

本質を見抜くチカラ，曲げずに生きるチカラ，人を許すことができる大らかなココロ，冨安先生の強さだと思う。生徒を信じるチカラ，生徒の長所を引き出すチカラ，冨安先生の優しさだと思う。

我々は，冨安先生の強さと優しさの中で，ゼミでの時間を過ごしていた。そして卒業して二十年が経った今も，冨安ゼミで過ごした時間を，温かく居心地の良かった空間として思い出す。

冨安先生，ゼミで感じた先生の優しさを忘れません。本当にありがとうございました。そして，お疲れ様でした。

新たなフィールドでのご活躍を祈念しております。

いつまでも私たちの「ホーム」で

太田（野口）志津子
（1995年度卒）

冨安先生のゼミに参加したのは，4年生の卒論ゼミから。総勢15名のゼミ生。みんなで和気あいあいと行う楽しいゼミの日々。ゼミ生の中にはTというやんちゃな者も居りました。私と同じ，編入組です。時々，冨安先生をからかうような言動があったのですが，冨安先生はいつも優しく対応されていて，「なんて，ジェントルマンなのだろう！」と，驚いたことを記憶しています。

夏休みには山梨でゼミ合宿。皆で待ち合わせをし，ドライブしながら現地へ。そして冨安先生と合流。

1日目は真面目に（？）ゼミを行いました。その日の夜，反省会という名の飲み会を開催。前出のTが，「冨安先生に呑ませて，次の日のゼミを遅らせよう！」という，悪だくみを思いつきました。それに賛同するものが多く（ごめんなさい。私もです。）みんなで沢山お酒を

呑ませ，冨安先生はあっという間に酔っぱらってしまい，ぐっすりとおやすみになりました。

次の日，私たちはゼミを行う部屋で待機していました。しかし，冨安先生は私たちの目論みどおり起きていらっしゃることはなく，雑談をして過ごすゼミ生一同。要するにサボりです。

あの時は，本当にすみませんでした。当時の冨安ゼミ一同を代表してお詫び申し上げます。18年後の「告白」ですが，きっと「ジェントルマン」の冨安先生はお許しくださるはずです。そうですよね，冨安先生！

また，いつも穏やかな冨安先生でしたが，時には怒りを露わにされるときがありました。私がそれを見たのは一度だけです。

当時，教員採用試験は氷河期。東京都で採用が30名だった時代。私は東京都を受験したのですが，失敗。その後，私学の受験案内がきました。冨安先生に「受けてみたらどうか。」と勧めていただき，受験しました。アドバイスのおかげもあり，最終選考まで行きました。しかし，最終選考の面接で落ちてしまいました。非常に落ち込みましたし，残念だったのですが，冨安先生に報告すると，「あなたを落とすなんて，学校は何を見ているのだろう！」と，強くおっしゃいました。怒る冨安先生を見て，驚いたとともに，嬉しかったことを覚えています。冨安先生，あの時はありがとうございました。

現在，小学校教師として働くことができるのも立教で学んだ2年間があるからこそ。立教は私たちにとって大切な「ホーム」です。冨安先生，いつまでも私たちの「ホーム」でいてください。

人生を豊かにしてくれた日々

寺田（北）美玲
（1996年度卒）

小5の娘をはじめ4人の子どもたち中心の生活を送っていると，つい，日々のことに気を取られ，過去を改めて振り返ることもないくらい慌ただしい毎日を過ごしています。

そんな中，少しだけ心や時間に余裕が生まれた2年前，“教育学科50周年記念行事”のパーティーにお誘いいただき，卒業以来，初めて大学に足を運びました。

冨安先生とも再会し，パーティーが終わってから先生の設計図が元となったロイドホールの4階から上をご案内いただいたり，研究室では私たちの"手書き"の卒論が並ぶ棚を見ながら昔話に花を咲かせたりと，とても懐かしい時間を過ごしました。

また，その会への参加がご縁で，冨安先生が今年3月にご定年を迎えられるとお聞きし，退職記念発起人会のお手伝いをさせていただくことになりました。

良い機会をいただいたと，再び友人らと連絡を取り始めましたが，毎日顔を合わせていた仲間との日々や，教育学科で学んだことは，不思議なことに，17年近く経った今でも面白いようにすぐに蘇ってまいりました。

中でも，後半の初等科専攻の2年間と教育

実習，そして冨安ゼミでの充実した日々は，数多く思い出されます。

冨安ゼミの中でも，私たちの代は「遊び」という特定の研究テーマをもった珍しい代で，そのテーマから，先生も安易な方向に行くのではとご心配されたのではないかと思います。しかし，その不安を吹き飛ばすかのように，大所帯の22名は固い絆で結ばれ，抜群の結束力で調査を進め，清里での夏合宿では無邪気に真剣に「遊び」を実践しました。

私たちはまるで"身体の大きな小学生"と，"担任の冨安先生"のようだったと記憶しています。本当にのびのびと自由に，冨安先生は私たちを信じて見守ってくださいました。

また先生は普段からご自身の趣味の車の話，漫画の話など，たくさんの魅力的な話を聞かせてくださいました。そして気がつけば，私たちも"遊ぶ"ことがどれだけ人生を豊かにするかを知っている大人へと成長しました。

こうして振り返ってみると，ゼミでの研究や合宿での実践を経験した教育学科での4年間は，私自身の今の子育ての根底を作り上げてくれたのだと改めて気づかされ，大きな喜びを感じております。

そしてなによりも，仲間との再結束のチャンスをくださった冨安先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

冨安先生のご退官に寄せて

小野田高士
（1999年度卒）

この度はご退官誠におめでとうございます。小学校の先生をめざし立教大学の扉をたたきました。在学期間中，学業は疎かにしないという決意だけは固く授業には真面目に取り組んでいた記憶があります。3年生進学時，ゼミの選択がありました。「ゼミ」というものをあまり理解していなかったのは確かです。友達とどの先生のゼミを選ぶか相談したのも覚えています。学業は疎かにしないと言いつつ，「冨安先生のゼミでは陶芸ができるらしい」という邪な動機で冨安先生のゼミを選択しました。今はなくなってしまった一食の隣にあった15号館。プレハブみたいな建物で，鉄製の階段を上がってゼミ室に行きます。そこは，キャンパスから切り離されたような空間でした。教室の横にはテラスみたいな場所があり，友達との憩いの場となっていました。今でこそ時効ですが，ゼミ室にジェンガや人生ゲームを持ち込み仲間と楽しい時間を過ごしました。

冨安先生とのやりとりで一番記憶に残っているのはゼミ合宿です。3年時にゼミ長を務めていた私は，旅行会社と掛け合いゼミ合宿の場所を選定しました。費用，参加者，輸送方法など段取りを組んだのが大変有意義だったのを覚えています。冨安先生も参加するはずでしたが，直前に冨安先生のご親族にご不幸があり，急遽参加できなくなってしまいました。担当教授不在の中，ゼミ合宿を行うことになりました。それでも，予定していた活動をゼミ仲間と共に実施しました。冨安先生のお知り合いが勤めている山梨県立美術館に

も足を運びました。最後，仲間とほうとうを食べてゼミ合宿を閉じました。

冨安先生は，最後までご自分が参加できないことを申し訳ないと繰り返し，私たちのことを気にかけてくださいました。ゼミ合宿終了後，合宿の様子を報告したところ大変温かい言葉を頂き，大きな励みになったことを覚えています。

温かい雰囲気で楽しい時間を過ごしたことばかりが思い出されます。冨安先生の誕生日に，ゼミ生でバルセロナのユニフォームをプレゼントしました。その時の，先生の満面の笑顔。授業の後や休日には教育学科の仲間と冨安先生を誘って，よくサッカーをしました。冨安先生のゴール，忘れません。

近くでいつも気にかけてくださいました。公立小学校の採用試験に失敗した私に，現在勤めている私立小学校の採用試験を勧めて頂きました。冨安先生からのお話が，私の教員生活のスタートです。いつかきちんとお礼を言わなければと思い，時だけが過ぎていきました。冨安先生，ありがとうございました。ご退官後も多方面で一層ご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

冨安敬二先生

杉田協士
（2000年度卒）

先日，冨安ゼミにお邪魔した。冨安敬二先生の退職記念行事に向けて制作する記念映像の撮影のためで，ビデオカメラを構えながら冨安先生を見ていた。プレゼンテーション用のパソコンソフト・パワーポイントを使用しての学生のみなさんによる発表が行われていて，照明の消された教室のなか，スクリーンに投影される映像の光だけが，先生の顔を薄く照らしていた。直前に，暗いから写しづらいかもと教えてくれた。構わず録画した。暗くても，先生の目は見えた。変わらなかった。14 年前にも，自分はその目を見ていた。

冨安先生はやさしい。話しかけると穏やかに答えてくれる。けれどいつも，何かを見つめる目は，こちらを寄せつけない。私はこの人のことを知らない，そう思わせる目。

生きることが何であるかという問いは，私のなかにある。冨安先生のなかにある。いま目の前で発表している学生のみなさんのなかにある。それぞれが，孤独にそれと向き合い，共有することもなく，けれど，あるときたまたま同じ場所にいて，同じ時間をすごす。そして言葉を交わすことができる。誰かが代わりに答えてくれるはずのないその問いを抱えたまま，一緒にいることができる。この世界を生きるとは，そのようなことでいいのだと，冨安先生の目は教えてくれた。いままたその目を見ることができて，ほっとした。何も変わらないし，きっとそれはこの先もつづく。

「ものづくり」の本質を学んだ冨安ゼミ

新井信宏
（2000年度卒）

冨安先生，「ご卒業」おめでとうございます。

祖母や叔父が小学校の教員だったため，自分も同じ道を志そうと入学した教育学科。しかし，結局は3年生になるときに「初等教育」ではなく「教育学」を専攻し，卒業後は「ものづくり」に携わる仕事に就きました。その指針を示してくださったのが冨安先生です。

15号館（当時）2階。カタカタと鉄製の階段を上がった先にある，図工室のような空間。どこか懐かしい匂い。そこが，冨安ゼミの拠点でした。その場所で初めて，先生とお話をいたしました。東京藝大大学院卒。濃厚なヒゲに，熱い眼差し…。初めてお話しするまでは，完全に先生のことを誤解していました（笑）。実際にお話しすると，なんと物腰の柔らかいことか！当時20代前半の私の眼には，「物腰柔らかく，思いは熱く」という先生の生きる姿勢が「大人の男像」として映りました。情熱的に「ものづくり」に打ち込むだけでなく，自分の言葉で伝えることも含めてそれが「ものづくり」の本質なのだと学びました。「自分もああいった大人になれないか」――私には美術の能力はありませんでしたが，本気で自分の進路を考える中で「何か『ものづくり』に打ち込んでそれを自分の言葉で伝えられる仕事に就けないか」という思いが強くなりました。そこで私は，放送現場の仕事を選びました。

NHKに入って間もなく14年。今もアナウンサーという肩書でありながら，番組という「ものづくり」に向き合う毎日です。自分ではよくわかりませんが，テレビをご覧の方からは「物腰の柔らかさがあなたのアナウンサーとしての魅力」とお手紙をいただきます。まだしばらくは福岡におりますのでなかなかお会いできませんが，先生，今度お会いした際には，少しは「大人の男像」に近づけているかぜひご教示ください！　どうかお元気で!!

追伸

先生の後輩である東京藝大大学院を卒業したアナウンサーが去年の春NHKに入局し，今，同じ九州で大活躍しています。そのアナウンサーは元々「ものづくり」に情熱的でそれを自分の言葉で伝えられる大人なので，先生から学ばせていただいたことを教える必要はありませんが，どこか学舎の後輩のようにも思えて大活躍を心から応援している次第です。

砂のように今を

稲村（戸塚）史華
（2005年度卒）

冨安先生，この度は，ご退職，誠におめでとうございます。

先生とのご縁は，私が当時文学部にできて間もない比較文芸・思想コースに転向した学

部２年生 (2000 年) の後期，チューターを務めて頂いたことがきっかけです。このコースは学科の枠にとらわれず横断的に学ぶことをめざす場であり，それを良いことに今思えば何とも未熟で風変わりな発想をしていましたが，先生はそれをいつも面白がってくださり，さらに想像力をかきたてるような多くのヒントをくださいました。不安だった当時，大変心強かったことを覚えています。

卒業論文は安部公房の小説『砂の女』から砂の可塑性に着想をえて，視点を変えることや既成の枠を超えることでモザイクのように広がっていく学びの過程を砂場遊びや点描主義・キュビズムといった芸術作品の鑑賞のあり方も交えて考察するというものでした。何とも大風呂敷を広げた，読み返すと恥ずかしい内容ですが，このときも先生は最後まで親身にご指導くださいました。このとき私は学ぶこと・考えることの自由さや豊かさのようなものを感じたのだと思います。

そうした経緯を経て大学院に進み，美術教育を専攻した修士課程時代も指導教授を務めていただきました。院生時代は，TA をさせていただいたり，先生が審査員をされていた世界児童画展のお手伝いで世界中の子どもたちの絵画を見る機会に恵まれたり，また先生に後押ししていただき美術館のお仕事をさせていただいたりと，沢山の貴重な経験も積ませていただきました。

そのような中，先生は折にふれ「新しい仕事を作る人になりなさい」とおっしゃっていました。そのお言葉は 10 年以上たった今もなお，「自分次第で何者にでもなれるのだよ」という励ましのように胸に響いています。すでにそこにある何か・イメージした未来にはまっていくのではなく，不確かで不定形なまま（砂のように！）今を自由に生きていく，そんなのびのびとした気持ちをもち続けていられるのは先生の教えのおかげだと思っています。

修了したのち，何度か息子を連れて先生のところに伺いましたが，孫の顔を見せに行ったような気持ちで (笑) とても心が温まりました。いつも優しく迎えてくださること，そして大学を離れてもなお気にかけてくださることに，感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

今後とも健康に留意され，ますますご活躍されますことをお祈りいたしております。

冨安先生の授業で見つけたこと

奥津咲子
（2006年度卒）

私は，教育学科に入って受けた授業の中で，冨安先生が受けもってくださっていた図工に関する授業が一番好きでした。

というのも，冨安先生の授業は教育学としての理論に関してはもちろんですが，実技の時間が非常に多く，図工という教科の面白さ，自分の手で何かを『表現する』『作りだす』ことの楽しさ・喜びを体感させてくださるものだったからです。

鉛筆の動かし方から始まり，立教内の風景

をスケッチし，上野動物園へ学科のみんなで動物を観察しに行って粘土の銅像を作り上げ，方眼紙で自分の好きな建造物のオブジェを作って発表し…と，授業はさまざまでユニークな内容でした。

小さい頃，私は暇さえあれば何かを切ったり貼ったり塗ったりして遊んでいて，工作や絵を描くことが大好きだったのですが，歳を重ねるにつれて，勉強や塾，部活やバイトと日々の中でやることが増え，次第に何かを作ったりする機会がなくなっていってしまっていました。

しかし，この冨安先生の授業で，それに夢中だった子どもの頃を鮮やかに思い出すことができました。そして授業を受けるごとに，昔ただ漠然と好きだったその「モノ作り」という行為が，小さい頃の自分にとってなぜそんなに魅力的だったのか理解できたのです。

アイデアが浮かんだ時の高揚感，無心でそれを表現するための作業にのめり込める没頭感，試行錯誤を重ねる間の集中力や想像力，完成したときの達成感，自分が伝えたいことが形になった嬉しさ，そしてそれを実際に誰かに見てもらえ，わかってもらえ，認めてもらえたときの喜び。

「授業」という場で「生徒」としてそれらを体感するとともに，大人になってから子どもの目線で再体験したことで，何かを作ることの魅力や素晴らしさを，上記のように具体的な言葉として改めて明確に認識でき，「だからあんなに夢中になれたんだ」と，とてもすんなりと腑に落ちました。そして，「モノ作り」の過程・経験を通して得る力が，子どもの成長にとってどれだけ大切かも実感したのです。

私はまた，「モノ作り」に大きな興味をもつようになりました。

現在私は，大学での冨安先生の授業とゼミで学んだことを生かし，教育業界で映像コンテンツを主に制作しております。そのコンテンツが，子どもたちがわかりやすく楽しく学習でき，学びや成長の役に立ってほしいと願うとともに，自分もこうして何かを『作りだす』ということを，この先もずっと続けていきたいと考えています。

冨安先生は私にとって，自分の人生において大事な軸になることを気づかせてくださった恩師です。これまでのご指導，本当にありがとうございました。

冨安教授へ感謝の意を込めて

常川純平
（2014年度卒見込）

この度は冨安敬二教授のご退職にあたり，永年に渡るご功績とご苦労を讃え，心よりお祝い申し上げます。また冨安教授がお元気にこの日をお迎えになられたことを嬉しく存じます。

私と冨安教授が初めてお会いした時の第一印象は，まさに私のイメージする芸術家という印象でした。ゼミでは，非常に生徒の自主性を重んじてくれ，自ら学ぶことの楽しさを教えていただきました。

当時の私は，大学に行くことのモチベーションが上がらない状況でしたが，ゼミでの活

動で学ぶことの楽しさを覚え，ゼミをきっかけに進んで大学へ行くようになりました。ゼミ合宿でロケット花火を持って騒いでいたら，冨安教授に叱られたことは今では良い思い出です。4年生の時には，退職記念行事のお手伝いについてお声掛けいただき，素敵な卒業生の皆様とお会いしたり，お食事をご一緒しお話をさせていただいたりと普通の大学生ではなかなか経験できない貴重な経験を沢山させていただきました。

すぐ近くで，先生のお人柄にふれ，多くのことを教えていただいたこと，私の大学生活は恵まれていたことを改めて実感しております。名残は尽きませんが，冨安教授のご活躍とご健康をお祈りし，心よりお礼申し上げます。

先生の笑顔

玉理稔基
（2014年度卒見込）

冨安先生，ご退職おめでとうございます。

2年前，先生のゼミに入らせていただくため，願書を書いていた日のことを今でも思い出します。期限ギリギリまで手を付けていなかった私は，前日，マク○ナルドにて，徹夜で仕上げていました。当時は先生の授業を受けたこともなく，デザインという言葉に軽い興味をもっただけで選びました。それが今では，このような場に投稿させていただけるほど，先生と深く結びつけられたことは，私の最大の自慢に思えます。

車に向かって花火を打ち，怒られたゼミ合宿。覇気がないと怒られながらも（怒られてばかりですね。すみませんでした。）無事に，研究結果の製本つくりまでたどり着いた3年ゼミ。そして4年生になり，研究室で，卒業生のこと，美術のこと，ご家族のこと，車のこと，ここに書ききることのできないほど，お話させていただきました。そして，私たちに話をされる先生のお顔は，きまっていつも笑顔でしたね。

大学でさまざまなことを学びましたが，なによりも，先生とお話しさせていただいた時間は宝物です。またいつか，先生のお宅にお邪魔させていただき，その笑顔を見られる日を，心から楽しみにしています。

冨安先生，本当にありがとうございました。